

富本銭が語りはじめたこと

奈良文化財研究所都城発掘調査部考古第一研究室長 松村恵司

誰もが知っている源頼朝の肖像画は、最近の研究では実は頼朝ではないという説が出てきているように、近年、遺跡の発掘・調査や、史料の研究によって、さまざまなことが明らかにされ、歴史の教科書が書き換わっていることをご存じでしょうか。貨幣史においても、これまで通説と考えられてきたことは違う新事実が見えてきています。最新の研究結果をもとに、貨幣の歴史ロマンの世界に皆さまをお連れしましょう。まず、第一回は、飛鳥池遺跡を発掘・調査された、富本銭研究の第一人者・松村恵司先生に、日本古代銭貨の研究史上画期的な意味を持つと言われる富本銭と、和同開珎を巡るお話を伺いました。

監修／東京大学大学院総合文化研究科助教 桜井英治

銭を用いよ。銀銭を用いること莫れ。」という詔が見えます。この詔の銀銭と銅銭が一体何を意味するのか、江戸時代以来、多くの人々を悩ませてきました。この飛鳥池遺跡の発掘によって、銅銭が富本銭、銀銭が無文銀銭であることが判明し、長らくの謎が氷解したのです。

富本銭と藤原京

そもそも、どんな目的で大量の富本銭がつくられたのでしょうか。その答えは藤原京（六九四～七一〇年）にあります。藤原京は日本で最初に建設された中国式の都城で、天武天皇が建設に着手し、持統天皇の時代に完成しました。瓦葺きの宮殿や役所が建ち並ぶ「宮」の周囲に、「京」と呼ばれる約五・三キロメートル四方の街区が基盤の目状に配置されていました。この計画的な都市に集住させられたのは、役人やその家族、兵士や諸国の役民たちで、その人口は数方にのぼると推定されています。初めての都市住民の誕生です。彼ら

古代貨幣の謎を解く鍵

飛鳥池遺跡

飛鳥池遺跡は、古代飛鳥の中枢部に営まれた巨大な総合工房遺跡です。一九九七年から二〇〇一年にかけて



富本銭。七曜文の文様を持つ（写真提供：奈良文化財研究所）。



自ら発掘された飛鳥池遺跡からの出土品を手にする奈良文化財研究所の松村先生。

発掘調査され、七世紀後半から八世紀初頭にかけて稼動した工房跡であることが分かりました。南西五〇〇メートルには、律令国家の礎を築いた天武天皇の飛鳥浄御原宮があり、わが国最古の本格的寺院である飛鳥寺に南接した谷筋に立地しています。工房は、谷に面した丘陵の斜面をひな壇のように造成した平坦面に配置され、金銀や銅、鉄、ガラス、漆などを素材に、様々な製品を生産していました。谷の低地には、工房の操業時に生じた炭や灰、破損した道具や未製品などが投棄され、一メートル近い廃棄物層を形成しています。

この廃棄物層から、五六〇点に上る富本銭が出土し、それまで奈良時代の厭勝銭（まじない銭）と考えられてきた富本銭が、七世紀後半にさかのぼることが明らかになったのです。富本銭はいずれも未製品や不良品で、飛鳥池遺跡の一面で富本銭が铸造されたことを示しています。発掘が進むと、富本銭の鑄型や、鑄造に用いたルツボ、やすり、作業台などが出土し、富本銭の製作工程を詳細に復元できるようになりました。わが国の最初の正史である『日本書紀』には、天武天皇十二年（西暦六八三年）に「今より以後、必ず銅



富本銭と鑄棒（いざお）。出土した富本銭の未完成品や鑄型などさまざまな遺物から、その製作技術を具体的に復元できるようにした（写真提供：奈良文化財研究所）。

工房遺跡である飛鳥池遺跡からは、金を溶かしたルツボ（右側）と銀を溶かしたルツボ（左側）のほか、瑠璃（るり）と呼ばれる古代ガラスなどの宝玉類（下）も出土しており、当時の最先端技術を集積した巨大な総合工房であることが明らかになっている（写真提供：奈良文化財研究所）。



える緊要の政策でした。富本銭は藤原京の都市住民の経済生活を支えるために発行されましたが、藤原京を舞台に、貨幣制度の導入に向けた壮大な実験が行われたといえるかもしれません。藤原京に続く平城京の造営で

は、生産基盤のある本貫地から切り離され、食料や生活必需品の自給自足を失い、都市生活を余儀なくされました。このため、国家は都市住民が生み出す膨大な消費活動を保証しなければなりません。中国では古くから都城に市は必須のものとされていますが、藤原京にも官営の東西市が建設されました。この市場で従来どおりの物々交換によって物資を調達するのは、利便性に欠けます。せつかく中国式の都を建設したので、中国の貨幣制度を模倣し、都の流通経済システムを整備するのは当然のことでしょう。貨幣制度の導入は、当時の近代化の象徴ともい

は、必要な資材をあらかじめ計画的に調達するために、工事着手の前に和同開珎を発行して、その費用を捻出しています。富本銭発行の経験をもとに、今度は平城京を中心に、さらに全国へと銭貨を拡大させることを意図して発行されたのが和同開珎であったと考えられます。

当時の国際情勢を読み解く

富本銭は、中国の貨幣の代表である開元通宝が確立した四文字の銭文を採用していません。大きさや重量は開元通宝をまねていますが、富本銭は二文字で、七曜文とよばれる特殊な文様をもっています。続く和同開珎は、銭文も規格も開元通宝と瓜二つの姿に変わります。その違いの背景には、当時の国際情勢が色濃く影響しているようです。

六六三年に隣国の百済の復興をめぐって、日本と唐・新羅の連合軍が白村江で戦い、日本は大敗を喫してしまいます。国内は唐・新羅の侵攻の危機に直面し、対外防衛の強化が急務となりました。遣唐使の派遣も

六六九年から七〇二年まで中断します。そうした軍事的緊張下で、日本は国内体制を整備し、中国的な律令国家を建設していくわけですが、対立していた唐の制度を直接模倣する

ことにはためらいがあったのでしよう。六二一年に唐で開元通宝が発行されたことはもちろん知っていましたが、それより前の時代、前漢から七〇〇年間の長きにわたって中国の標準貨幣であった五銖銭を富本銭のモデルにしたと考えられます。「富本」の銭文も、富国、富民の本、という後漢時代の五銖銭復活の故事から採られていますし、藤原京も、唐の長安城の模倣を避けて、古い中国の都城の理念に基づいて設計されています。

その後、七〇一年に大宝律令が成立し、律令国家が完成すると、翌年には遣唐使が派遣され、三四年ぶりに国交が修復します。しかし遣唐使が見た唐の長安城の威容は、自分たちが建設した藤原京とあまりにも違うことを痛感したのでしよう。今度は積極的に唐の文化や文物を導入、模倣し始め、藤原京をわずか一六年で廃止し、長安城にならった平城京の造営が始まります。富本銭も同じ運命をたどり、唐の開元通宝を忠実に模倣した和同開珎に生まれ変わったのだらうと思います。

「和同開珎」の意味

慶雲五年（七〇八）、武蔵国秩父から和銅（にぎあかがね＝自然銅）が発見され、これにちなんで元明天皇

は和銅と改元したとの記録があります。和同開珎の発行年をめぐっては、この和銅元年に発行されたとする説と、先ほどの『日本書紀』の記述に関連させて、天武天皇の時代につくられたとする説が長く対立してきました。前者は和同開珎を「和銅開寶」の「銅」と「寶」を省略したものと考え、和銅元年発行の根拠としました。一方、後者は、文字の省略は認めず、和同は年号とは関係のない吉語で、天武朝発行を唱えました。教科書が「カイホウ」「カイチン」両者の読みを併記するのは、この論争を考慮したものです。しかしながら最近の研究では、「和同」は吉語であり、同時に年号の和銅に音通させた、という解釈が有力です。中国の和同の用法を調べていくと、万物和同、天地和同のように、調和という意味をもっています。興味深いことに、富本銭の七曜文も、天（日）と地（月）の間で、五行（木・火・土・金・水）が調和のとれた状態を圖像化したもので、富



和同開珎銀銭（左側）と銅銭（右側）。和銅元年（708年）5月にまず銀銭が発行され、8月になって銅銭が発行されたと「続日本紀」に記録されている（貨幣博物館所蔵）。



1991年、飛鳥池の埋め立て工事に伴う事前調査によって、池底に眠る遺跡が発見された。1997年から3年にも及ぶ大規模な発掘調査により、他に例を見ない大規模な工房遺跡であることが判明した。工房廃棄物層から採取した土嚢は10万5千袋に上り、それらを全てふるいにかけて水洗いし、遺物を回収したという（写真提供：奈良文化財研究所）。

本銭の七曜文と、和同開珎の「和同」はともに、天地・万物の調和が保たれた状態を意味しています。

一方「開珎」ですが、後漢の光武帝が王莽を滅ぼして漢王朝を復興した時の言葉に「坤珍を闢き」（地が瑞祥を示した）という一節が出てきます。また聖武天皇の時代には、陸奥

産金を称えた光明皇后の言葉に「神祇は祥を呈り、地は珎を惜しまず」という表現が見え、地が産出した黄金が「珎」と表現されています。開とは開のことで、坤は地のこと、珎は珍の通字ですから、ともに皇帝や天皇の徳の高さによって、地が瑞祥をもたらしたことを称えた表現です。これらの用例を踏まえて、和同と開珎の意味を一体的に解釈すると、「元明天皇の徳の高さによって、天地や万物が和同し、和銅という坤珍ももたらされた」と理解できます。これは和銅産出の祥瑞を祝う改元の詔とほぼ同じ内容であり、改元の詔を銭文に刻み、同時に年号と銭文を音通させるという心憎いばかりの演出を讀み取ることができます。和同開珎

は「ワドウカイチン」であり、和銅元年発行の事実は、もはや動きようがありません。

和同開珎の流通実態

和同開珎の価値ですが、発行当初は一文一功といつて、一文が一日の労賃に相当しました。この価値は銭の素材価値よりもはるかに高く、銭貨発行によって国家は莫大な利益を得たと考えられます。

銭貨の発行目的には、このような銭貨発行利益の獲得のほかに、携帯の便利さを考慮したことも知られています。当時の税としては租庸調が有名ですが、調と庸は各地の特産品や布を都に納税する規定で、その運京費用も納税者が負担しました。運京者は自らの食料を持参しますが、帰郷時に食料が無くなり、飢え苦しむという事態が発生しました。そこで政府は彼らの救済措置のために、軽貨である銭貨を持たせ、帰路にあたる地域の有力者に、お金と交換に米を売るように命じています。つまり携帯に便利な貨幣を持たせることで、米などの重い食料を運ぶ負担を軽減させたわけです。現在、和同開珎の出土遺跡は、平城京を中心に、古代の国道沿いに分布する傾向が認められますが、そうした政策の反映

ともみられます。しかしながら、和同開珎が全国的に広く流通していた可能性は低く、律令国家の中枢部であった都と畿内、地方では国衙周辺に限定されていました。

無文銀銭と古代貨幣

古代貨幣にはもう一つ、無文銀銭と呼ばれるものがあります。これは直径三センチ前後、重さ一〇グラム強の銀の円板で、中央に二ミリほどの小孔が空いています。この銀銭は江戸時代に発掘され、長らく顕宗天皇（伝四〇〇〜四八七年）の時代の銀銭ではないかと考えられてきました。

無文銀銭は現在までに、奈良県や滋賀県を中心に一七の遺跡から出土しています。これらの中には七世紀後半の遺跡もあり、先述の天武天皇の詔に登場する銀銭がこれに相当すると考えられるようになりました。

無文銀銭は、表面に銀の小片を貼り付けて、一両の四分の一にあたる一分に重量調整されています。いわば古代の「一分銀」ですが、その製作地は、当時、銀や金を多く産出した朝鮮半島の新羅と考えられます。素材価値に支えられた貴金属の金銀貨は、少量でも価値が高く、国境を越えて流通する普遍的な性格を備えています。富本銭や和同開珎のよう

に、自国経済のために発行された国内用通貨とは、性格が異なります。無文銀銭は、分という重量単位を共有する中国、韓国、日本の間の国際交易の場で、国際通貨に近い役割を果たしたのでしょう。また当然、高額取引や外国旅費、軍費、富の貯蓄などにも用いられたと推測されます。激動する七世紀後半の東アジア情勢の中で、無文銀銭は、国家の領域を越えて流通した国際色豊かな銀銭と考えられます。

中国の貨幣制度を模倣し、銅銭を基軸にした貨幣経済を確立しようとした古代国家にとつて、民間での銀銭の流通は好ましい事態とはいえません。無文銀銭の使用を禁止し、新たに発行した銅銭（富本銭）の使用を命じる、それが天武十二年の詔の真意とみられます。しかし人々は素材価値と貨幣価値の乖離した銅銭（名目貨幣）の使用に抵抗があったのでしう。和同開珎の発行時にも銀銭を発行していますが、これは無文銀



富本銭の登場以前に流通していた無文銀銭（写真提供：奈良文化財研究所）。

【参考】貨幣史の流れ——貨幣の始まり～古代銭流通の終焉まで

赤字=日本 黒字=世界

西暦	日本・世界
800	●布幣（殷・周）
700	●西洋最古の金属金貨・エレクトロン貨(リディア)
600	
500	
400	●水田耕作伝来
300	334 アレキサンダー大王大遠征 221 秦、中国を統一 220 始皇帝貨幣統一（半両銭） 206 秦滅亡
200	202 漢（前漢）建国
100	118 前漢の武帝、五銖銭の鑄造開始
A.D. 0	
8	8 新建国
25	25 後漢建国
57	57 倭奴国王後漢から金印を受ける
105	105 蔡倫紙を発明
220	220 後漢滅亡→三国時代へ
239	239 邪馬台国卑弥呼魏に遣使
300	●大和朝廷全国統一
375	375 ゲルマン民族大移動始まる
400	
500	538 仏教伝来
581	581 隋の文帝、隋五銖銭鑄造開始
589	589 隋、南北朝統一
593~622	593~622 厩戸王（聖徳太子）摂政
607	607 遣隋使派遣
618	618 隋滅亡→唐建国
621	621 唐、開元通宝鑄造開始
630	630 遣唐使派遣
645	645 大化の改新
660	660 百濟滅亡
663	663 白村江の戦い
683	●国防政策が進められる
668	668 高句麗滅亡
673	673 天武天皇即位
674	674 対馬国、銀産出
676	676 新羅による朝鮮半島統一
●律令・国史編纂、藤原京造営開始	
●富本銭鑄造	
683	683 銭貨使用の最古の記録（日本書紀）
689	689 持統天皇、飛鳥浄御原令施行
694	694 藤原京遷都
701	701 大宝律令制定
708	708 和同開珎発行
710	710 平城京遷都
760	760 万年通宝発行
784	784 長岡京遷都
794	794 平安京遷都
894	894 遣唐使廃止
907	907 唐滅亡
936	936 高麗、朝鮮統一
958	958 乾元大宝発行
●班田制行われず荘園増大	
960	960 宋建国
●世界最古の紙幣発生（北宋「交子」）	
987	987 銭貨の利用停止宣言



矢じりと砂金



秦の始皇帝による統一形状貨幣・半両銭



最後の皇朝銭・乾元大宝

古代の人々は、自給自足の生活をしていたので、交換のなかだちとなる貨幣は必要としなかったが、やがて物々交換によって欲しいものを手に入れるようになった。①誰もが欲しがり、②集めたり分けたりして任意の値打ちを表すことができ、③持ち運びや保存の容易な品物が交換のなかだちとして使用されるようになる。これが矢じりや稲、砂金などの物品貨幣である。

物品貨幣のなかで、金・銀・銅の金属が貨幣として優れた性質をもっていたため、広く用いられるようになる。紀元前3世紀に、秦の始皇帝が漢字を配した円形方孔（中央に正方形の穴をあけた円形）の貨幣に統一してから、この形態が約2000年間の長きにわたり踏襲されるとともに、東アジアの中国文化圏に多大なる影響を及ぼした。

わが国では、7世紀の天武天皇のころに発行された富本銭に続き、708年、和同開珎が鑄造された。独自の銭名をもつ貨幣の鑄造は、東アジアでは中国に次いで早いとされる。

それ以後、約250年の間に、12回にわたり国家的に銭貨が鑄造された（いわゆる「皇朝十二銭」）。政府は財政事情の悪化や銅の枯渇などから改鑄のたびに材質を悪化させたため、通貨価値が急速に悪化し、やがては民衆の銭離れが起きて、10世紀末には皇朝銭鑄造が停止され、再び物品貨幣が主流となる時代を迎えるのである。

写真/貨幣博物館所蔵

銭を回収することに目的があったようです。政府はやがて和同銀銭を禁止し、銅銭に一本化することに成功します。こうして銅銭による国内貨幣が確立しますが、時代が進むにつ

れて、政府は貨幣の発行利益を主要な財源とし始めます。その端緒は七六〇年に発行された万年通宝で、新銭一文の価値を旧銭の和同開珎一〇文と定められました。以降、貨幣の改鑄

時には、新銭に旧銭の一〇倍の価値を定めます。銅資源の枯渇もあって、銭貨の大きさは次第に軽小化していくので、貨幣の価値はインフレーションで低下し、貨幣に対する人々の

信用は失われていきます。こうして日本の古代貨幣は自滅の道をたどり、一〇世紀半ばの乾元大宝を最後に、やがて良質な中国の宋銭にその地位を奪われることとなります。